歴史編

日本のウイスキーの歴史上のブランド総覧　2017年ed.1掲載時に作成した情報

Histrical Whisky Brands in Japan　edited at ed.1 2017.07.14 by fk

KITA SANGYO

[参考情報 1]　1980年代の「地ウイスキーブーム時代」に存在した、「今はないブランド」　（「今も続くブランド」を含めると1980年代には20以上のブランドがあった）

●社名は当時のもので、今は経営主体が変わっている場合、会社が存在しない場合もある。●すべてを網羅していないと思われる。●ウイスキー免許はもつが醸造設備を持たず、ブレンド品を自社ブランドで売る会社も含む。

名称　（北から県別）	銘柄	Brand (or Company) name	種別	蒸留器※	創業年・開業年※※	住所（部分公開）	コメント
群馬	美峰酒類	ゴールドカップ、ほか	ウイスキー		UK	高崎市	
埼玉	ローズウイスキー	ローズ・ハミー	ウイスキー		UK	所沢市	
新潟	金升酒造	キンショー	ウイスキー		UK	新発田市	
山梨	モンデ酒造	ロイヤルクリスタル、モンデ、ほか	ウイスキー		UK	笛吹市	
山梨	富士醗酵工業	リリアン	ウイスキー		UK	塩山市	
千葉	合同酒精	ナンバーワン、ネプチューン、コルトウイスキー、ほか	ウイスキー		1951	松戸市	
東京	協和醗酵工業	ダイヤモンド	ウイスキー		UK	千代田区	
静岡	東洋醸造	45、ジュピター、バイロン	ウイスキー		UK	伊豆の国市	
静岡	福泉産業	オールドジョウ	ウイスキー		UK	富士市	
愛知	東海発酵工業	ラッキーサン	ウイスキー		UK	名古屋市	
大阪	西川洋酒	キングライオン	ウイスキー		UK	大阪市	
徳島	日新酒類	ヤングセブン	ウイスキー		UK	徳島市	
沖縄	バートン	バートン	ウイスキー		UK	うるま市	
沖縄	クラウン商事	クラウン	ウイスキー		UK	浦添市	

[参考情報 2]　1960年以降に閉鎖されたウイスキー蒸留所（上記の地ウイスキーブーム時代のブランドとは、あまり関係ないと考えられるもの）

●社名は当時のもので、今は経営主体が替わっている場合、会社が存在しない場合もある。●すべてを網羅していないと思われる。

福島	大黒葡萄酒→宝酒造の白河蒸留所	キングウイスキー アイデアルウイスキー		ウイスキー		～2003	白河市	元は大黒葡萄酒が1939年に設立した工場　オーシャンの原酒を造っていたかどうかは不明 戦後、占領軍の独占禁止政策にそって、大黒葡萄酒は宝酒造の系列を離れて独立　その影響で白河工場は1947年に宝酒造が買収して白河工場・蒸留所となり「キングウイスキー」ブランドを生産　2003年に閉鎖、千葉の松戸工場へ移転 1960年ころは、寿屋（サントリー）、ニッカ、大黒葡萄酒（オーシャン）、東洋醸造（レアオールド）、宝酒造（キング一特級、アイデアル一二級の一升壜）が国産ウイスキー主要5ブランド
埼玉	東亜酒造の羽生蒸留所	ゴールデンホース		ウイスキー		C1980～2000	羽生市	1946年の免許取得当初は輸入原酒のブレンドだったが1980年ころポットスチルを設置、2000年まで蒸留していた 「ゴールデンホース」、COOP向けの「虹の宴」ブランドなど　2004年にキング醸造傘下に　このとき在庫のウイスキー樽はベンチャーウイスキーの肥土伊知郎氏に引き継がれた
東京	大黒葡萄酒→オーシャンの東京工場	オーシャン		ウイスキー		1946～1965？	新宿区	1919年開設の工場　戦災で全焼した東京工場を戦後再建、1946年に蒸留器を設置　1965年頃から壜詰め中心の工場に　1966年東京工場廃止
神奈川	三楽酒造→三楽オーシャンの川崎工場	オーシャン サンラック		ウイスキー		1958～C1980	川崎市	三楽酒造の川崎工場として1935年竣工、1958年からモルトとグレーンを製造　モルト製造は1961年までで以降は山梨に移管　1962年にオーシャンと合併して三楽オーシャンとなる　1966年にオーシャン東京工場を藤沢工場に・藤沢工場の蒸留器を川崎工場に移設 1969年に英国マクミラン社のカフェ式連続蒸留器を導入してグレーンウイスキーを製造　以降、川崎でグレーン、軽井沢でモルトの体制　三楽オーシャンは1985年に三楽株式会社に、1990年にメルシャンとなった　工場閉鎖は2003年 なお、三楽はオーシャンとは別に、1937年から「サンラック・ウイスキー」を、1959年から「サンラック・ゴールド・ウイスキー」を販売していた
神奈川	東京醸造の藤沢工場	トミーウイスキー		ウイスキー		～C1960	藤沢市	東京醸造は戦前に混成ウイスキーを造っていた会社だがポットスチルを導入　1937年に「トミーウイスキー」を発売　1955年倒産　工場は寿屋、ついで森永醸造の手にわたったが1960年代に閉鎖　寿屋以降にウイスキー製造に使われたかどうかは不明
山梨	三楽酒造→三楽オーシャンの山梨工場	サンラック		ウイスキー		1961～1969	山梨市	川崎工場だけでは原酒不足になると考えて増設された工場　ステンレス製のは初留・再留ポットスチル各1基　三楽オーシャンに合併後は製造は軽井沢に集約
長野	大黒葡萄酒→オーシャン→三楽オーシャン→メルシャンの軽井沢蒸留所	オーシャン 軽井沢		ウイスキー		1955～2011	北佐久郡	オーシャンは大黒葡萄酒時代からのブランド　戦後1946年からオーシャンウイスキーとして発売、本格ウイスキーとしては1954年から　サントリー、ニッカと並ぶブランドだった　1961年に大黒葡萄酒からオーシャンに社名変更 軽井沢は元は大黒葡萄酒の軽井沢農園として1936年に設置　蒸留所は1955年から稼動　4基の小型ポットスチルがあった　2011年に閉鎖 1976年から「軽井沢」を販売　市場に残る軽井沢ブランドのウイスキーは1本数十万円と高価　ナンバーワンドリンクス（「京都蒸留所」参照）がいまも海外に輸出
長野	大黒葡萄酒の塩尻工場	オーシャン		ウイスキー		1952～1956	塩尻市	1938年開設の工場　1952年から免許を得てモルトを製造　ポットスチル1基で初留と再留　1956年に軽井沢に製造を移管
兵庫	ニッカウヰスキーの西宮蒸留所	ニッカ		ウイスキー		1962～1999	西宮市	1962年に英国ブレア社のカフェ式グレインウイスキー連続蒸留器を導入　アサヒビール西宮工場の隣接地で今もニッカの西宮工場　蒸留器は1999年に宮城へ移設され、現役で使われている
鹿児島	本坊酒造、鹿児島工場	マルス		ウイスキー		1949～1985	鹿児島市	本坊酒造の最初のウイスキー蒸留場所　免許は山梨に、次いで長野に移された　初期の鹿児島の蒸留器は現在、津貫に飾られている　現在もモルトオブカゴシマが入手可能

Copyright Kita Sangyo Co., Ltd. 2017 ed.1 (2025 ed.6)

[参考情報 3]　戦後4年目、1949年に存在した、ウイスキーブランド（「全国酒造家名鑑」（昭和24年11月発行）から、「雑酒」でウイスキーと思われるものを抽出）

●当時は酒税のカテゴリーに「ウイスキー」がなく「雑酒」に分類されていた。銘柄にウイスキーがついていない場合は推定で抽出し、カテゴリー欄に（ウイスキー）と記した。
●住所は当時のもの。　●引用文献に寿屋・山崎蒸留所の記載がなく、明らかな欠落と思われたので補記した。

北海道	大日本果汁（現、ニッカ）	ニッカウヰスキー		ウイスキー			余市郡	
北海道	札幌酒精	サッポロウイスキー		ウイスキー			札幌郡と亀田郡	
岩手	濱藤酒造店	ローヤルウイスキー		ウイスキー			盛岡市	
福島	郡山酒造（現、笹の川）	チェリーウイスキー		ウイスキー			郡山市	
福島	寶酒造・白河工場	キングウイスキー		ウイスキー			白河市	
栃木	橋本雄飛太郎	ウイスキーユーブリッチ		ウイスキー			下都賀郡富山村	
群馬	美峰酒類	シティクラブウイスキー		ウイスキー			高崎市	
新潟	金升酒造	キンショウウイスキー		ウイスキー			北蒲原郡	
千葉	中央酒類	セントラル		（ウイスキー）			市川市	
東京	菊美酒精	白鳩ウイスキー		ウイスキー			墨田区向島	
神奈川	大和酒造	イリスウイスキー		ウイスキー			藤沢市大庭	
神奈川	東京醸造	トミモルトウイスキー		ウイスキー			藤沢市藤沢	
神奈川	三楽酒造	サンラック		（ウイスキー）			川崎市	
愛知	東海醗酵	ラッキーサン		（ウイスキー）			西春日井郡	
愛知	廣瀬合名	ゴールデンビル		（ウイスキー）			名古屋市	
愛知	丸中酒造	オールドパシフィック		（ウイスキー）			半田市	
静岡	福泉食品工業	ラッキーセブン		ウイスキー			富士郡	
三重	宮崎由太郎（現、宮崎本店）	ピースウイスキー		（ウイスキー）			三重郡	
岐阜	間三吉	サンフジ		（ウイスキー）			恵那郡中津川	
岐阜	玉泉堂	ピーク		（ウイスキー）			養老郡	
大阪	寿屋	サントリーウイスキー		ウイスキー			三島郡山崎	
大阪	摂津酒造	金扇？		（ウイスキー）			住吉区	
大阪	萬歳酒造	ロングライフ		ウイスキー			此花区	（2025.05.04追記）
兵庫	西宮酒精	ウイスキー		ウイスキー			西宮市	
兵庫	第一酒造	アベックウイスキー		ウイスキー			武庫郡御影町	
岡山	辻本店	ウイスキー		ウイスキー			真庭郡	
広島	中国酒造	（銘柄不詳）		（ウイスキー）			佐伯郡	
山口	日本化業製造・厚狭化成工場	サンウイスキー		ウイスキー			美祢郡	
長崎	宝酒造・長崎工場	アイデアルウイスキー		ウイスキー			長崎市	
大分	寿屋・大分工場	オールドサントリーウイスキー		ウイスキー			北海部郡臼杵	

[参考情報 4]　第二次世界大戦、直前・直後の日本のウイスキーの状況

●開戦の年、1939年度（昭和14年3月～15年2月）に製造された県別のウイスキー
「東京5,900石、大阪3,632石、兵庫1,305石、神奈川1,163石、北海道302石、広島286石、100石以下静岡、福岡、愛知、岡山」（出典：「合同酒精社史（昭和45年刊）」）

東京はオーシャン・東京工場など数社、大阪は寿屋（現、サントリー）・山崎蒸溜所など、兵庫は江井ヶ島酒造など、神奈川は三楽酒造・川崎工場や東京醸造・藤沢工場など、北海道は合同酒精・旭川工場など（ニッカは未発売）、と推定される。
それ以下の、広島、静岡、福岡、愛知、岡山の各県にも小規模なウイスキー製造工場があったことになるが、銘柄は不明。合計製造者数は20社程度だと推定。
戦中は日本海軍の指定工場（寿屋やニッカ）では大きな需要があったが、それ以外の多くの会社は、特に戦争末期はウイスキー製造を休止したと考えられる。

●終戦の翌年、1946年頃の状況
「新たに二十軒を超える酒造会社がウイスキー製造免許を得ていた」（出典：「ヒゲのウヰスキー誕生す」 川又一英　初版は1983年）

●終戦の5年後、1950年頃の状況
「ウイスキーの輸入は昭和十五年（1940年）を最後に蹟絶（とだえ）えていた。国産ウイスキーはこの年、寿屋、大日本果汁、東京醸造、三楽酒造など三十数社が製造免許を持っていた（後略）」
「当時、ウイスキー市場の八割近くは三級ウイスキーで占められていた。三級ウイスキーは税法上 ＜原酒が五パーセント以下、〇パーセントまで入ってりるもの＞ と規程されていた。
〇パーセント、つまりウイスキー原酒が一滴も入っていなくとも、税金さえ納めればウイスキーとして堂々と通用した。」（出典：同上）

戦後は占領軍の影響もあってウイスキー需要が高まり、製造者が30数社になった。食料にも困窮する経済環境下で、安価な三級ウイスキー（当時は、一、二、三級の3段階）が最もよく売れた。
戦時下と戦後の多くの三級ウイスキーは、購入したアルコールをベースに造られていた。良心的な場合は原酒（輸入できないので、寿屋、大日本果汁、東京醸造、三楽酒造などから購入）をブレンドしていたが、まったく原酒の入っていないものも多々あった。
この時代のいくつかの三級ウイスキーブランドは、[参考情報 6] で述べる初期の模造ウイスキーより、さらに模造度合いが高いと考えられる。

[参考情報 5]　昭和初期に日本に存在した、大手ブランド以外の本格ウイスキーの事例

清酒「大平山」ブランドの小玉合名（現、小玉醸造）は、「昭和17年、大成酒造として東北初の合成清酒工場を建設した。軍用燃料アルコールやウイスキー製造にも着手した。「ラッキーウイスキー」はポットスチルと樫樽を用いた本格的モルトウイスキーだったが、戦後は種類の生産拡大に伴い清酒に専念」（「上方”酒”ばなし」（大阪大学総合学術博物館叢書）から）　大手ブランド以外にもポットスチルを導入した酒造家がいたことがわかる。

[参考情報 6]　明治末期から大正、昭和初期にかけて日本に存在した、模造ウイスキー、混成ウイスキーのブランド

今でいえば「模造（イミテーション）」だが、当時は「合成」や「混成」といわれ、一般的、あるいはむしろ進歩的とされた。多くのブランドが存在したそうですが、ブランド名は調査できていません。
たとえば寿屋も山崎蒸溜所（1923年着工）以前、1911年（明治44年）に混成ウイスキー「ヘルメスウイスキー」を発売、また1920年（大正9年）には壜詰めウイスキーハイボール「ウヰスタン」（たぶん「ウイスキー炭酸」を短くしたネーミング）を発売していた。1919年、偶々樽詰めで長期保管されていたリキュール用アルコールがまろやかな味になっていることを見つけ「トリスウイスキー」として限定販売したものが好評だったことが、鳥井信治郎のウイスキー製造の動機の一つであったといわれる。
日本では終戦後まで、ウイスキーだけでなくワインも清酒も、混成や合成の商品が多かった。「合成清酒」は今も一定の市場規模で残っている。

Copyright Kita Sangyo Co., Ltd. 2017 ed.1 (2025 ed.6)

[参考情報 7]　竹鶴以前にウイスキーに取り組んだ日本人、高峰譲吉

竹鶴政孝：大阪高等工業学校（現、阪大工学部）醸造科から、大阪の有力洋酒メーカーの摂津酒造（寿屋の赤玉ポートワインの製造受託もおこなっていた）に就職。当時同社は国産の本格ウイスキーを計画しており、社長の阿部喜兵衛、常務の岩井喜一郎が、技術習得のため竹鶴政孝を1918年にスコットランドに送り出した。竹鶴は、グラスゴー大学で学び、蒸溜所でウイスキー製造を体得して1920年11月帰国。ところが、帰国したとき摂津酒造は経営状況が芳しくなくウイスキー製造を断念。もしそうでなければ、日本初の本格ウイスキーは、寿屋（サントリー）ではなく、摂津酒造だったかもしれない。（摂津酒造は1964年に宝酒造と合併。現、宝酒造灘工場は、摂津酒造の敷地。）

高峰譲吉：タカジアスターゼやアドレナリンの発見者であり、三共（現、第一三共）の初代社長。工部大学校（現、東大工学部）応用化学科を首席で卒業。1880年から英国グラスゴー大学への3年間の留学を経て、農商務省に入省。米国で特許出願した「高峰式元麹改良法」はウイスキー製造に用いるモルト（麦を発芽させてその酵素で糖化する）よりはるかに効率の良い方法で、その技術に目を付けた当時アメリカ最大のウイスキー会社、シカゴのウイスキートラスト社からの招聘を受け、1890年、高峰は米国にわたる。1891年、イリノイ州ピオリア（シカゴから南西200km。当時ウイスキー原酒をほぼ独占的に供給していた街、現在はキャタピラー社の本社があることで有名）に居を構え、試験醸造所で麹による糖化の実証実験を行う。個人として招聘企業に雇用されるのではなく、「Takamine Ferment Company」（タカミネ・ファーメント社、麹の技術を売り物とする会社）を設立して、会社として招聘企業と開発契約した。麹による麦糖化は、実用化の目処がついたが、モルト業者らの執拗な抵抗にあい、不審火によって試験醸造所を焼失。結局この技術は実用されることなく、日の目を見ずに終わっている。

竹鶴と高峰：サントリー山崎の初代工場長（1923年）、ニッカの創業（1934年）、本坊酒造信州工場の蒸留器（1985年）は竹鶴ノートを基に岩井喜一郎が設計したことなど、竹鶴政孝は「日本ウイスキーの始祖」であることは間違えない。一方、高峰譲吉が竹鶴の38年前に同じグラスゴー大学で学び、竹鶴が日本でウイスキーつくりに携わる32年前にアメリカのウイスキー企業で新技術を研究していたことは、日本ウイスキー産業史に記すべきことと考える。高峰はグラスゴー大学時代にウイスキー製造の概要を知り、モルトより麹のほうが効率が良いという着想を得たのだと考える。
余談ながら、現在、カナダのウイスキー（ライ麦のウイスキー）で、麹で糖化した製品がある。法律でウイスキーの糖化法はモルトと定めている日本や英国では実現出来ない方法だが、カナダで高峰の構想が実現した格好だ。さらに余談ながら、高峰の妻キャロラインはアメリカ人、竹鶴の妻リタはイギリス人で、ともに国際結婚。二人の妻は高峰。竹鶴の業績に大きな貢献を果たしている。この国際結婚がなければ、日本のウイスキーや、第一三共はなかったかもしれないと思う。
竹鶴政孝：大阪高等工業学校（現、阪大工学部）醸造科をへて、大阪の有力洋酒メーカーの摂津酒造（寿屋の赤玉ポートワインの製造受託もおこなっていた）に就職。当時同社は国産の本格ウイスキーを計画しており、技術習得のため社長の阿部喜兵衛、常務の岩井喜一郎が、竹鶴政孝を1918年にスコットランドに送り出した。竹鶴は、グラスゴー大学に学びウイスキー製造を体得して1920年11月帰国。帰国したとき摂津酒造は経営状況が芳しくなくウイスキー製造を断念したが、そうでなければ、日本初の本格ウイスキーは、寿屋（サントリー）ではなく、摂津酒造だったかもしれない。（摂津酒造は1964年に宝酒造と合併。現、宝酒造灘工場は、摂津酒造の敷地。）

ed.2(@2019.07.31)の追加情報　→　[参考情報 8]　日本では売られていない、海外で「ジャパニーズ・ウイスキー」として販売されている銘柄

●海外の店頭やネットで販売が確認できるジャパニーズ・ウイスキーで、2018年～2021年に市場に供給されたと考えられるもの。●すべてを網羅していないと思われる。●一部の製造者は不記載とした。

主な流通地域	銘柄名・英文	銘柄名・和文 （ラベルに表記のある場合）	製造者	原酒が製造される地域、または販売者がある地	ラベル表記の酒類区分	備考
アメリカ	KIKORI	（ラベル裏の和文に平かなで「きこり」）	- - -	熊本	whisky	米原料
アメリカ	Ohishi Whisky	大石	- - -	熊本	whisky	米原料
アメリカ	Fukano Distillery Whisky	深野	- - -	熊本	whisky	米原料
アメリカ	YAME	八女	- - -	福岡	whisky	米原料
アメリカ	KAIYO	海洋	Kaiyo Ltd.	大阪	whisky	「ミズナラ樽で熟成」というコンセプト、ラベル記載の製造者は香港
アメリカ	SENSEI	先生	- - -	山梨	whisky	「ミズナラ樽で熟成」というコンセプト
アメリカ	MEIKAKUNA	明確な	Shiki Syuzo	兵庫	whisky	
ヨーロッパ	KARUIZAWA	軽井沢	- - -	東京	whisky	閉鎖されたメルシャン軽井沢蒸留所の原酒が、今も少しづつボトリングされて、ヨーロッパや中国に供給されている
ヨーロッパ	KAMIKI	神息	Yoshino Spirits	大阪	whisky	「吉野杉の樽で熟成」というコンセプト
ヨーロッパ	Japanese Blended Whisky #1 21 Year Old - Batch 1	恁笊　（日本の常用漢字ではないが、ネイシェンと読む）	That Boutique-y Whisky Company	英国	whisky	日本のウイスキー原酒をブレンドした商品
ヨーロッパ	MEIYO	名誉	- - -	沖縄	whisky	輸出用の銘柄
ヨーロッパ	FUYU	冬	- - -	北海道	whisky	輸出用の銘柄
ヨーロッパ	MEISEI	名聲	江井ケ嶋酒造	兵庫	whisky	輸出用の銘柄
ヨーロッパ	FUJIMI	不死身	松井酒造	鳥取	whisky	輸出用の銘柄
大手ブランドの輸出専用モデル						
アメリカ・ヨーロッパ	TOKI	季	サントリー		whisky	
ヨーロッパ	Nikka Days	- - -	ニッカ		whisky	

●本リスト・資料には不明な項目が多くあります。また抜けや間違いがあるかもしれません。ご存知の情報、お気づきの点などがありましたら、きた産業のコンタクトフォームを使ってご一報ください。

(end of papers)

Copyright Kita Sangyo Co., Ltd. 2017 ed.1 (2025 ed.6)